



礼拝に出席した帰りに、礼拝のために捧げられた講壇の花を数本プレゼントされました。白い浜木綿の切り花を手にしたのは初めてでした。浜木綿は太い茎の上で、たくさんの細い若草色の蕾が伸び、蕾は人知れず、パッと白い6枚の花弁に分かれて、しなやかに反りかえります。紫色の細い花芯が花火のように花弁の上で開き、花を飾るように、一体化します。とても珍しくて、一緒に頂いたオレンジ色のミニ薔薇とカーネーションと共に小さい花瓶にさしました。部屋の中

に柔らかい芳香がしています。思わず浜木綿に目が行きます。以前、鉢植えのインド浜木綿を頂いて、それを育てましたが、やはりいい香りがしました。インド浜木綿は百合を滑らかにしたような姿で、ほっそりと美しかったことを覚えています。花にはいつも癒されると思いながら花言葉を調べると「どこか遠くへ」が最初に出てきました。南の浜辺に咲く花だからでしょうか。花の命は短くて苦しきことのみ多かりきの言葉通りに、咲き切った花から順番に切り落としていかざるを得ません。

目下、ベランダで、葉が細長い、不思議な小さい薔薇が咲いています。夕方に1cmの蕾を見つけ、明日こそ、咲き始めを見るぞ、と願いつつ、翌朝には5cmに開ききった姿を発見するばかりなのです。花びらに筋目が入り、花芯の横にも小さい花びらがついています。匂いは薄い感じがします。正体を極めたいと思いつつ、出し抜かれてばかりなのです。これも珍しいです。



先日、末妹と電話で話しが出来ました。彼女は闘病中です。免疫力が落ちているので、感染を避けるため、空気清浄機を2台入れた部屋で暮らしています。だんだん体力がついてきて、回復に向かっていると喜んでおります。すぐ下の妹は外出中に熱中症で倒れ、救急搬送され、肺炎と診断され、十日間ほど入院しました。私はこのところ、次々と小さな手術が続き、病院とは縁が切れません。姉妹が相哀れむ状態に陥っているのですが、末妹が「病気を体験して良かった。苦しんでいる人の気持ちが分かった」と言います。また、「神様の御心、ご計画に委ねて、心配していない。今できることを精一杯楽しんでいる」と言います。そして、「花という文字は死という文字に似ているよ。花を見ると死も考える。花のようにみんなを楽しませて、喜ばせて、自分も咲き切って、満足して終わらしましょう」とも言いました。驚きましたが、なるほどとも感じました。両方に共通しているのは「ヒ」です。

花

「ヒ」は象形文字としては、「年老いた女性の形にかたどり、亡き母の意味を表す」と新漢語林では説明がありました。いにしえの人々の心遣いが感じられてなりません。

死

旧約聖書のヨブが「人は女から生まれ、人生は短く/苦しみは絶えない。花のように咲き出せば、しおれ/影のように移ろい、永らえることはない。(ヨブ14:1)」と苦しみを吐露しています。新約聖書でも「人は皆、草のようで、/その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、/花は散る。(1ペトロ1:24)」と「人は花」とも言っています。けれどもそのすぐあとの25節で「しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです。」と付け加えています。「野の花がどのようにそだつのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。…だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労はその日だけで十分である。(マタイ 6:28)」とイエス様が励ましてくださる言葉を覚えて、今日も花を愛でたいと思います。